

【論文】

アンドレ・ブルトン『通底器』における 夢の記述の一読解の試み(Ⅲ)

泉谷安規

(承前)

Ⅳ-1. 夢とは何か

ここからは、夢についての単純ではあるが根本的な疑問を提起することからはじめたい。

夢は、睡眠中に見られる一連の、あるいは断片的なイメージであり、誰もが夢を見るという経験をしている。おそらく、一部の人々(芸術家やフロイトのような研究者)を除いて、そこに特別な意味を見だしたり、観察や研究の対象にしたり、それをもとになんらかの作品をつくりだすようなことはめったにないだろう。その意味においては、普通の人々にとって、夢はなんら特別なものではない日常的な出来事のうちの一つであり、夢を見た後にさほどそれにこだわらずに、やがて忘れてしまう。なかには、何度も同じ夢が繰り返されたり、それこそ悪夢のようなものを見て怖い思いもしたりするが、身体の疲労やその日の気分のせいであるという常識的な判断で割り切って、それほど気にはとめないだろう。

しかし、医師フロイトは違っていた。19世紀の終わりから20世紀初頭にかけて、精神医学の臨床治療にたずさわっていたフロイトは、夢を睡眠中の人間に見られる通常の生理現象とはみなさず、それを病理学的症状のなかにはっきり位置づけている¹⁾。それまでヒステリー研究に従事していたフロイトは、夢の持つ重要性に気づき、それを模範として、他の精神疾患の症例の理解を深めていった。こうして生み出されたのが『夢解釈』(1900年)である。したがって、フロイトにとって夢は、さまざまな症例を解き明かすためのヒントであると同時に、夢それ自体が病理的症狀の表れそのものだったのである。フロイトは精神病理学研究を深めていくうちに、夢の持っている深い意味に突き当たり、夢を契機にさまざまな症例の解明に着手していく。そしてわれわれに残されたそうした諸症例の記録のなかには、きまっと言っているほど夢について言及された箇所があり、われわれはそれを読むことができる。したがって、フロイトにとって夢とは、そこから出発しそこへ戻っていく、中心点のようなものといっているかもしれない。

このように、夢に関しては、過去の常識、いわんや現代の常識でさえも、フロイトの見解とは、真っ向から対立するように見える。20世紀初頭に出現したフロイトとその学説がある種、革命的であったのは、当然であろう。これは夢についてだけに言えることではない。ごく当たりで、普通

のものだと思っているわれわれの日常の仕種や行動、フロイトによれば、それらの根底には病理学的な動機が潜っているとされる（そのフロイトの説を信じる、信じないは別問題として）。『日常生活の精神病理学』（1901年）や『機知』（1905年）という著作は、その最たるものだろう。

フロイトの著作『夢解釈』を通して改めて夢を見てみると、今まで気づかなかった夢の新たな側面が見えてくる。それは、ごくありふれた日常体験とは違った謎めいたなものなのだ。怖い夢や悪夢を典型例として、そもそも夢の内容にはなぜ同じようなイメージが繰り返し現れてくるのか。また、その背景は、遠い過去の彼方に霞んでいる昔日の記憶や幼年期のものが多いのはなぜか。それにまた、鮮明なイメージと印象を残す夢ほど、目覚めの直後になぜかすぐに忘却のなかに沈んでしまうのかも、思えば不思議な現象である。

フロイトの有名な定義は、夢は「欲望成就」(accomplissement de désir) である。

フロイトによれば、夢を見る人が心のなかに抱いている不満、あるいは、自分でも認めたくない願望、良心の呵責などが、夢のなかに入り込み、それらが材料となり、本人にもわからないようなイメージやストーリーに作り変えられ、一見すると支離滅裂な仕方に組み立てられる。「抑圧」(refoulement) という機制や「夢の作業[夢工作]」と呼ばれている作用によって。だから、夢はそれを見る本人にとっても、制御不能であり、何であるか正体も不明で、まるでどこか他所から訪れる不思議な来訪者のようである。だから、夢は、古来から、ある時には摩訶不思議で神秘的な予言や前兆であると解釈されたり、あるいは神のお告げや芸術の源泉として崇められ畏れられたりしてきた。あるいは逆に、非合理的で荒唐無稽な幻想や気の迷いであると嘲笑されてきた。

しかしながら、フロイトは、夢を予言や前兆などの超自然現象であるとか、ましてや非合理的で荒唐無稽な幻想や気の迷いとは考えず、夢には夢固有の意味があると確信していた²⁾。夢を根気強く観察し、緻密に分析していくことによって、つまり、「抑圧」を取り除き、「夢の作業[夢工作]」を解き明かすことで、そこに夢を見る人間の、隠されているが（むしろ隠されているがゆえに）軽視しがたい切実な心の真実を見出すことができると信じていた。それが「夢の解釈」の本来的な意図である。アンドレ・ブルトンもまたその点では異論はなかったはずである。夢の解釈の多くが完璧にはほど遠く、しかも得られた解釈が正しいか否かは置くとしても。

だが問題はその先である。観察や分析によってある程度解きほぐされた、夢のもつ意味とは何だろうか。その意味が明らかにする、心の真実とは何であるのか。あるいはもっと具体的に、夢の意味や心の真実は、夢を見る本人にとって、どのような意味をもつものなのであろうか。白日に晒されたそれは、望ましいものなのか、あるいは目をそむけたいような心の真実なのか。

この問いに答えるためには、まず、人が夢を見ることの意味、つまり「欲望成就」から逆にたどりをおしていくことも一つのヒントとなるだろう。すでに述べたように、人が夢を見るのは、自分でも認めたくない願望や不満や良心の呵責を夢のなかにおいて、現実世界とは違う形、仮想した姿で処理することを目的としている。言葉を換えて言えば、自ら意識化することを拒む事柄を、意識とその意識の検閲機能が弱まる睡眠時において、それと知らずに発動させているのである。明らか

にここには、自己矛盾がある。まず、人は、自らが認めたくない願望、排除したい記憶を決定的に捨て去ることができないのである。人間の本性がもともとそのようなものに作られているならば、これはこれで仕方のないことかもしれない。だがもっと不可解なのは、それでいながら、人間は、自分が避けたいと思っている願望や記憶に、自らの意思に反してまでも、固執し執着しようとするのである。それが「外傷（心的外傷）」(trauma または traumatisme (psychique) (仏) / Trauma (独) / trauma (英))³⁾ と呼ばれるものである。そして、この心の傷をもった人間は、それを正常な状態に戻そうとすると、それとは正反対の態度や反応を示すことがあるのである。精神的疾患の治療時にしばしば観察される、こうした人間の不可思議な反応が「抵抗」(résistance / Widerstand / resistance) である⁴⁾。自ら忌避したい外的刺激を心へ過剰負荷しようとする動き、こうして作られる心的インフレーション状態、それにもかかわらず、それを軽減し改善しようとしめない不可解な傾向と固着、これらが心の病、神経症やヒステリーなどを誘発する。この心のなかのリビドー[リビード]の需要供給のアンバランス、制御しがたい欲動の絡んだきわめて不均衡な取り引きが夢のなかで行われている。

ところで、もう一度同じ問いを繰り返すが、夢を見ることの意義とは、そもそも誰にとっての意義であろうか？ もちろん、それはなによりも、夢見る本人にとっての意義であり、現実世界において不安や苦痛に遭遇した人間が、夢のなかで、夢を見ることによって、その傷をいくらかでも癒そうとする。なんらかの救いや償いを求めようとする。そのための夢なのだ。現実原則にうまく適合できない人間は決して少なくなく、一般に言って、そのような人は心に傷をもっているとみなされる。夢によって、心の傷を癒そうとするのが夢の機能と効果であるだろう。もちろん夢は、楽しく心地よい夢ばかりではない。それとは反対に、しばしば何度も繰り返し見る不安や恐怖の感情を与える悪夢もあることは、われわれが日常的に経験するところである。にもかかわらず、夢の「欲望成就」とは、夢のイメージがどのようなものであれ、また夢が喚起する感情が快適ないしは快楽的なものであれ、あるいは反対に後味の悪い性格のものであれ、最終的な目的は、われわれの心になんらかの安定や解決を与えようとするごく自然な試みであろう。だから、フロイトの『夢解釈』の最初の批判者の多くは、そこに引用されているほとんどの夢がフロイトの治療を受けている患者の夢であるとか、あるいはフロイト本人(フロイトもまた自身が神経症であったことを認めている)の夢を借り受けているということを批判の理由の一つにしている。つまり『夢解釈』の夢は健常者の夢ではなく、夢という現象の本質を明らかにするという目的では、一般性を持たないというわけである⁵⁾。

今ではさすがにこういう偏った批判は鳴りを潜めているだろうが、それでも夢研究は、こうしたいかがわしい出自以外に、ある埋めがたい空隙を抱えている。それが夢の伝達困難さである。一番わかりやすい例で言うと、夢を見た本人がその夢にいくら深い感動と印象を受けようとも、それを見たのではない他人がその話を聞かされたり読まされたりしても、たいていさっぱり面白くないのは、これもまた日常茶飯事の事実であろう。夢を伝達することの困難さがここにある。

だが、それでは夢は、夢を見る本人にだけに意味を持ち、それ以外の他人にとっては無意味なも

のだろうか。確かに、ある論者たちが主張するように、夢は睡眠中に何らかの刺激を受けた人が、それを受けて心的イメージを形成していく生理的組織的反応には違いないだろう。そして眠りから覚めるやいなや、夢はその内容と効果を喪失し、日中の活動では無益なものとして消えてしまう。しかしそれは、夜間、誰もが睡眠中経験することであり、夢を見ることによってある程度、慰謝を得ることができるとすれば、あながち無意味とは言えないだろう。それにもかかわらず、夢の「欲望成就」は、その夢を見る人だけにしか役に立たないとすれば、それは自己充足的なものにとどまり、それ以上の意義は持ちえないであろう。フロイトの『夢解釈』という著作も、先に述べたように、精神疾患の治療方法を模索するうちに夢の重要性に気づかされたものだとすれば、その夢の記述と分析は疾患の治療に従事する医療専門家たちだけにしか役に立たないマニュアルでしかないことになる。だが『夢解釈』は、専門家であれ素人であれ、夢に関心がある人が最も関心と興味を持って読む書物の一つであろう。

あるいは、別な観点から夢をこう考えてみる。古来から、数ある民話や伝承、ないしは歴史物語や小説のなかに「夢物語」がエピソードとしてしばしば登場するのは、なぜなのであろうか。それは、語りのなかに教訓や寓話として夢を加え、話を面白くしようとする、あるいは啓蒙的メッセージを相手に伝えようとする配慮や工夫であらうか。むしろ、物語のなかの夢は、夢物語としてしか伝えられない、人間の心の重要な秘密を誰かに打ち明けられる唯一の方途と言っているのかもしれない。ともあれ、少なくともその時、夢は薄暗い治療室の寝椅子から外へ飛び出し、多彩な解説を促す言葉や活字となって、われわれの目の前に姿を現す。例えば、『夢解釈』や『通底器』という書物の形をとって。

こうしてわれわれは、人間にとって、夢を見ることの必然性の問題から、夢を解釈したり分析したりすること、夢のイメージの翻訳の問題、夢を言語化することの問題圏域にすでに入っているのである⁶⁾。

IV-2. 夢を巡る時間

では引き続き、ブルトンの『通底器』Iの夢を検討していこう。

問題の夢をブルトンが見て、すぐにそれを記録したのは、1931年8月26日の払暁。マルグリット・ボネとエティエンヌ＝アラン・ユベールによるプレイヤッド版の「作品解題」によれば、本書の執筆に着手されたのは、夢のなかに出てくる人物ジョルジュ・サドゥールと8月20日から、一緒に夏を過ごした（そこにはブルトンの愛人であったヴァランティーヌ・ユゴーが短期滞在ではあるが合流している）、アルプ＝ド＝オート＝プロヴェンスにあるカステラーヌという小村においてであるという⁷⁾。しかしながら、本書はここで一気に書き上げられたのではなく、いったん中断を挟んでから、一年後に同じ場所カステラーヌで完成されている。書物としての『通底器』の出版は、翌年の1932年11月26日である。

ここで、ブルトン全集の編纂者の「作品解題」を参考にして、ブルトンが夢を見た晩から、それ

を『通底器』という本にまとめるまでの経緯を追ってきたのは、夢を見ている時間から、それを一冊の書物にまとめるまでの時間的過程の及ぼす影響を考えてみたかったからである。特にわれわれが扱っているブルトンの夢を巡る時間について、つまりそれを記述し、説明を加え、分析するあいだの時差を問題にしたいのである。

ここでもう少し詳しく時系列を整理しておこう。1931年8月26日の朝方に見られた夢を中心に、さまざまな時間が幾重にも錯綜している。まずは夢を見ている時間とそれを記述した時間。この二つの時間は、いつか特定がつけられる。「ただちに記録」(Ibid., p.118)とブルトンは、メモしているのだから。しかしながら夢を見ている瞬間とそれを記述するまでの間には、ほんの少しではあるが時間が経過しているし、何よりも夢見ているのは睡眠時、記述しているのは覚醒時という決定的な状況の違いがあるのは、今さら言うまでもない。そしてその後、夢の記述を終えてから、「補足的説明」を加え、長く詳細な「分析」をしていくには、かなりの手間暇がかけられているはずである。『通底器』Iには、こうした夢の内容と記述に関わる部分のほかに、それを前後に挟んで、夢研究と理論に関する論争的部分、そして夢の持つ価値とメカニズムについての言及がある。

執筆の経緯に話を戻すと、1931年の夏に夢を見て、記述の分析がすぐに書きはじめられたが、ブルトンの疲労と材料不足のために9月23日には、執筆がいったん中断されている。しかし、全集編纂者によれば、ブルトンは、パリに戻った後にそれまでに出来上がっていた部分、すなわち著作の最初の二つの部分 (deux premières parties) を友人たちに朗読しているという⁸⁾。

さらに複雑なのは、本書の一部が出版前に、雑誌『革命に奉仕するシュルレアリスム』の第3号と第4号(この二つの号は1931年12月に同時出版されている)に二度にわたって発表されていることである⁹⁾。夢内容の記述とは直接には関係ないが(雑誌掲載文の末尾には『通底器』のタイトル名が記されており、いずれの文章もそこからの抜粋であることが明らかにされている)、この二つの個所は、第3号のほうは、ブルトンの夢分析の後の部分に相当し、「オブジェ＝幽霊 (L'Objet fantôme)」と題され、ブルトン自身が制作した幽霊を想起させるシュルレアリスムのオブジェのことが述べられている¹⁰⁾。それは、「白あるいは大変明るい色の、中味の入っていない封筒。宛名はなく、閉じられていて赤い封蝟で封印されている。丸い封蝟には特定の押印はなく、むしろ印を捺す以前の封蝟といった趣。端にはまつ毛 (cils) が一面に生えており、持ち上げられるように側面には把手 (anse) がついている」(O.C. II, p.140。傍点強調ブルトン)。この封筒のオブジェはそもそも形そのものが奇怪であるが、二つの言葉「まつ毛」(cils)と「把手」(anse)の語呂合わせによって「封筒＝沈黙 (silence)」という名前がつけられているのが最大の特徴である¹¹⁾。これはシュルレアリスムの手法の一つ「優美な死骸」(cadavre exquis)によって生み出された詩的オブジェの一種である¹²⁾。ブルトンによれば、新しい時代の芸術活動が生み出していくべき作品であり、それに類した例として、ダリ、ピカソ、キリコ、デュシャン、エルンスト、ジャコメッティの絵画や彫刻、ロートレアモン有名な「手術台の上のミシンと雨傘との偶然の出会いのように美しい」という詩句が挙げられている。そしてこの「封筒＝沈黙」のオブジェが特異な点は、目覚めた後に夢を

想起する過程で、夢が元のイメージから離れて、他のオブジェや事物を想起させ別な事物・意味へと変わっていくのと同じ変化を辿っていくことである。ブルトンにとって、この「封筒＝沈黙」は、把手がある種の器＝便器を、赤い封蝋はその底についた（監視の？）眼を、そして封筒の白さが、幼年時、おねしょをしないように見張りにやって来る「怪物たち (monstres)」(O.C. II, p.137) のような恐怖の存在、すなわち白い夜着を身に包んであらわれる幽霊を思い起こさせるという。このオブジェは、不気味でエロティックなイメージをもったオブジェである。また、この詩的オブジェは、夢が「圧縮（縮合）」や「置き換え（遷移）」の作用によってしばしば変化を蒙るという点において、明らかに夢の相同物であろう。ちょうどブルトンの夢のなかに現れた、「ノスフェラトゥのネクタイ」がそうであるように¹³⁾。

それに対して、第4号掲載論文は、『通底器』の冒頭を占めるエルヴェ・ド・サン＝ドニ侯爵のエピソードを紹介する箇所を除いた前半部分で、「夢についての諸探求の歴史的意義に関するいくつかの留保」というタイトルが付されている。タイトルから容易に推察できるように、この部分は、『夢解釈』の第一章「夢問題の学問的文献」でフロイトが行ったのを模して、ブルトンもまた、夢の研究者たちの業績の評価や彼らの思想・信仰・イデオロギーについての評定、そして夢そのものに関しては、夢と現実との関係性、夢のなかにも現実と同じような「時間、空間、因果律」が存在するか否かの問題などが問われている¹⁴⁾。こちらの後者は、夢分析を行う前に当たる部分で、したがって、雑誌発表の順番は『通底器』の構成からいうと逆になっている。

そして、この雑誌掲載の迂回を経て、『通底器』が仕上げられたのが、一年後に再びブルトンが訪れた、カステラーヌにおいてであり、翌32年の8月の終わりのことである。残されている原稿には「カステラーヌ。1931年－1932年」と書かれているという。

ここまで見てきたのは、一つの夢を分析しそれを報告するといういわば実験＝実践にも似た作業、そして夢についてのほとんど唯一取り上げるに値する理論の（フロイトの）妥当性の検討作業、この二つのことについて一冊の書物にまとめるまでの制作過程なのである。しかしながら、こと『通底器』に関しては、その制作過程の時間の意味合いが通常の小説や評論などを書き上げたりするのは、若干、いや、かなり異なるように考えられる。

『通底器』が一冊の書物として完成に至るまでに費やされる制作過程の時間、そのIの中心部分を成している「夢」を見ている時間。これらは本来、別の次元に属する時間であり、特に前者の場合には一つの作品が作られていく過程では、偶然的な出来事が介在して、それが作品に影響を及ぼすということはよくあることである。だからといって二つはまったく無関係であるとは言えないのである。まず第一に、上で見たように、夢の内容、分析からはじまって、それを「優美な死骸」によってつくられる「シュルレアリスムのオブジェ」に結びつけるテキスト上の操作は、すでに夢から現実への境界侵犯と見なすことができるし、さらに興味深いことがもう一つある。夢が記述された後の「補足的説明」は、「1931年は私にとって、極度に暗い見通しのうちに明けた」(O.C. II, p.120) という文章で始まり、最後の文章は、カッコに挟まれて次のように終わっているのがそれで

ある。

(それから、時間が流れすぎた。その名前からして精神分析学者たちにきつと気に入るにちがいないサン島 (L'île de Sein) から眺めていて、翌年の夏、私は、船は海上にあっていっそう揺れ動くわけでもなく、またいっそう揺れ動かないわけでもないということに気づいた。船は、あらゆる事物と同様に、常に難破して滅びつつあり、また難破して滅びつつあるわけではない。世界中で共産主義運動が進行している。カステラーヌ (パス＝ザルプ県) において——去年、そこで私は突然この夢に襲われたのだが——すでに、不可能なことが可能なことのなかに戻ってきてそれと溶けあっていたのである。……さんさんたる陽光が、広場のプラタナスの木々にふりそそいでいた。) (O.C. II, p.122)

明らかにこの文章は、『通底器』という本が完成された後に挿入された文章である(そうブルトン全集編纂者も断言している。そして、サン島は生涯にわたって、ブルトンにとっては「特権的な場所」であったとコメントしている)¹⁵⁾。なによりも、文章のトーンが非常に明るく、すがすがしささえ感じられ、先ほど見た始まりの文章の暗い内容とは際立った対照を成している。このトーンの違いは、何に由来するのだろうか。いったん中断をはさんだ著作が無事に完成に至った安堵感か。それもあるだろうが、「不可能なことが可能なことのなかに戻ってきてそれと溶けあっていたのだ」という表現には、ブルトンの心境の変化が読み取れないだろうか。それも夢を契機とした、劇的な変化が。

この変化は何に由来するのか。睡眠中に見る夢と分析が『通底器』の内容の一部を成す——その素材となっている——という当たり前の問題以外にも、そこには注目すべき変化作用が働いていたのではないだろうか。例えば、書物としての『通底器』が完成されていく創作過程の外的時間と〈夢〉というものが持つ内的時間のあいだの浸透作用なものが。〈時間〉を巡るこうした問題、これからそれを考察していくことにしよう。

IV-3. 二人の夢の実験者：モーリとエルヴェ

この問題を論じるうえで格好の事例、人物がいる。フロイトが『夢解釈』のなかで紹介し、ブルトンもまた『通底器』で注目している、アルフレッド・モーリとエルヴェ・ド・サン＝ドニ侯爵という名の二人の夢研究者である。

アルフレッド・モーリ (Alfred MAURY, 1817-1892) は、歴史学、地理学、考古学、古今の言語学に造詣が深く、フランス学士院の司書、国立古文書館の責任者、コレージュ・ド・フランス教授を歴任した博学の士であり、また心理学や精神医学の知識にも詳しく、なによりも『睡眠と夢』 (*Le Sommeil et le rêve*) の著者として知られている。一方の、エルヴェ・ド・サン＝ドニ侯爵 (Marquis d'Hervey de Saint-Denys, 1822-1892) であるが、この人物については、『通底器』冒頭でブルトンが次のように紹介している。「エルヴェ＝サン＝ドニ侯爵、中国唐代の詩の翻訳者であり、また、

一八六七年に無署名で出版された『夢、そして夢を自由に操る方法——実際の諸観察』(*Les rêves et les moyens de les diriger. - Observations pratiques*)という表題の書物の作者でもあるが、この書物は稀覯本となり、フロイトもハヴロック・エリスも、この本に言及しながら、ついに手に入れることができなかつたほどである」(*O.C. II, p.103*)¹⁶⁾。エルヴェは専門は中国学で、コレージュ・ド・フランスの教授であるが、日常的に夢日記を書いていたということであり、上記のタイトルの著作を出版したことを契機に、モーリと夢に関する論争を交わしている。いわば夢のライバルである。

まず、両者の共通点は、当時、夢の重要性に着目し、実際に夢実験に着手したことである。協力者を得て、睡眠中に外的刺激を与えてもらい、それが夢内容に一定の影響を与えうるか否かの実験を行っている。例えば、睡眠中に顔をくすぐってもらったり、目の前に光をあててもらったり、あるいは特定の匂いをかがせてもらったり、音楽を聞かせてもらったりといった試みである¹⁷⁾。ここで誤解のないよう確認しておく、「夢刺激 (les Stimuli)」はフロイトも言うように、「何らかの形で睡眠が妨げられた結果が夢」であるのだから、「睡眠中に何か妨害となるものが蠢き出したりしなかつたら夢を見ることもなかつただろうし、夢というものはこの妨害への反応であるということになる」(『夢解釈 I』、p.38。I.R.M. p.28)つまり、睡眠を中断しようとするなんらかの内的・外的刺激を受けた時、眠っている人はそれでも睡眠を続けようと、身体的・生理的に条件的に反抗する過程で生じるのが夢である。この刺激が夢の「源泉」になる。だが同時に、その源泉が眠る者の秘められた願望・欲望を備えた心的形成物でもある夢を発生させる原因なのであるから、「刺激」は、夢を排除しつつ夢を招来するという矛盾循環した性格をもつことになる。こうした夢のメカニズムの複雑さ不可解さには、計り知れないものがある。このことは、「前意識」の問題として、エルヴェ侯爵に関連してフロイト自身を取り上げているので、後ほど、見ることにする。

次に、エルヴェについては、ブルトンの記述が詳しいので、それに沿って見ていく。エルヴェの夢実験の最大の成果は、その著作のタイトルが示すように、夢を「操る方法」、統御する方法を発見したことである。しかもそれには女性が一役買っているのである。まず、エルヴェは舞踏会で好意を寄せる二人の女性とワルツを踊るとき、指揮者に頼んで、それぞれの女性との踊りの時に、別種の決まった音楽を毎回演奏してもらう。そして、夜、ベッドに入った後、「オルゴールと目覚まし時計とを巧みに組み合わせた装置」(*O.C. II, p.105*)を用意して、眠っている間、そのどちらかの音楽を聴く。こうして、彼は、夢のなかで思うがままに、二人のうちのどちらかの女性と会うことができ、アヴァンチュールを楽しんでいたというのである。まことに単純極まりないが、確実ともいえる方法で、夢のなかで自らの欲望を充足させるやり方といえよう。ブルトンは、一見するとこれほど決定的に思われる実験が錯覚と誤差を排除せずに行われたのは遺憾であると留保をつけながらも、この方法自体については、ユイスマンスやランボーの名前を引き合いにだして、これらの先駆者の探求にも匹敵するような、驚くべき画期的な試みであると絶賛している。しかしながら、この実験の最大の欠点は、謹厳実直な性格のブルトンに言わせれば、次の点にある。なぜエルヴェにとって、夢のなかの女性は一人ではなく二人であったのか。つまり、夢のなかに現れる女性が二人

のうちのどちらかであったということは、エルヴェのその女性に寄せる愛情・欲望はエルヴェのその日の気分次第、自由裁量にまかされていたということであり——、ブルトンの表現を借りれば、「もう一度繰り返えして言うておくと、女性は二人いたのだから、その女性はことさら待ち望まれ、欲望されて夢に登場してきたのではない」(O.C. II, p.106)——、その意味においては、愛に関わる欲望を成就するという夢の本来の目的から逸れており、この実験は真剣みを、そして何よりも切実さを欠き、この実験はしょせん遊びにすぎないということになる。愛する女性は一人でなければならない、というのがブルトンの恋愛の鉄則である。それは、夢のなかでも、いや、夢であるからこそ、固く守られなければならない。ナジャ、妻シモーン、愛人のシュザンヌ・ミュザールといったそれぞれの女性たちが夢のなかに登場して、絶対的とも言える存在感を示していたことをわれわれはすでに、ブルトンの夢分析において十分に確認してきたはずである。ブルトンにとって夢は、愛の倫理性をも要求する。

ところで、ここでより重要に思われるのは、ブルトンがエルヴェの夢について言っている、つぎのことである。「エルヴェは彼が夢を見ている自分を観察するときはいつも、ということは彼が夢を見たいと思った時はいつでも、夢を見ている自分自身を見ている。これは一見すると大したことのように思える。が、結局とるに足らぬことだ」(O.C. II, p.113. 傍点強調ブルトン)。夢を統御しようとする意思、すなわち夢を好きな時に、好きなように見ること、したがって夢のなかで夢を見ている自分自身が出てくる夢を見るという「明晰夢」についてブルトンは「結局取るに足らぬことだ」と言い捨てているが、実は、このことは、『通底器』Iの二つの目のそのブルトンの夢に密接にかかわることであり、非常に重要な問題であるように思われる。ここでは、この問題が以下のモーリの夢でも重要なテーマ「夢の記憶」と「夢の時間(あるいは覚醒の時間)」に関わってくるとだけ言っておこう。この点に関しては、フロイトはこれに関しては、こう述べている。「私はこういう推論を引き出さざるを得ない。われわれは、睡眠状態にあるうちはずっと、自分が眠っているということを知っているのと同様に、自分が夢を見ているということを確認に知っているのである。(……)夜の間も自分が眠っていて夢を見ているという知を保持していることがまったく明らかであるような人々、それゆえ夢生活を色々に導くことができる意識的能力が備わっているように見える人々が存在する。このように夢を見る人は、たとえば夢がなんらかの転回を見せたとき、それに不満な場合は、目を覚ますことなく夢を中断する、新たに夢を見はじめる、そして別様に夢を見続けていく。(……)エルヴェ侯爵(……)は、自分自身の夢に対して、夢の経過を好きなように速めて、夢に好きな方向性を与えることのできる力を獲得したと主張した。彼にあつては、眠ろうとする欲望は、別の前意識的欲望(désir préconscient)に、その地位を禪譲したように思われる。それは、自分の夢を観察してそれを楽しんでやろうという欲望である。睡眠は、このような欲望の意図と共存できる。覚醒の条件として何らかの留保を置きながら眠る(すなわち乳母の眠りの場合)というのと、それは同じことだからである。そしてまた、夢に興味を持っていると、誰の場合でも、覚醒後に想起される夢の数がぐんと増えるということは、よく知られているところである」(『夢判断II』、

pp.369-370. *I.R.M.*, pp.486-487. 傍点強調フロイト)。ここで付け加えておくと、睡眠中の意識云々は、本文中にでてくるように、心の「審級」の一つである「前意識」に関わることであり、後で見ると、この「前意識」は、眠りをさまたげ夢を見させる「刺激」とも密接な関係にある。

ここでエルヴェとモーリの比較に戻ろう。

もう一つの点、この夢の実験者たる二人の意見が異なる点というのは、夢の性格と形成に関する見解についてである。

モーリの夢に関する基本的考えは、次の一節に明確に表されている。「夢とは『《思考力と推理力との一連の衰退》(二七頁)』(『夢解釈 I』、p.83. *I.R.M.* p.58)である、と。この見地から、モーリはちょうど反対の意見を持ち、「夢の心的能力の蔑視論に対して最も熱烈に意義を唱えた」(同書、p.88. *I.R.M.* p.61) エルヴェ・ド・サン＝ドニ侯爵を次のように激しく批判している。「《エルヴェ侯爵は、睡眠中の知性に、あらゆる行動と注意の自由を与えている。そして彼は、睡眠を、感覚の減却と外的世界からの閉塞によってのみ成り立つものとしているようである。そうなると、眠っている人間は、感覚を絶って思考をめぐらしている人間と、ほとんど区別がつかないことになる。普通の思考と眠る人の思考との違いのすべては、眠る人の思考では、観念が視覚的で客観的な形をとるということに懸かっている。だから観念は、取り違えられえ、外界の対象から規定された感覚に似てくる。想起されたもの (le souvenir) も、現にそこにあるものという外観をとることになる》」。(同書。 *Ibid.*) モーリのエルヴェ批判は、ここに読まれるように、まず覚醒と眠りがまったく別物で、眠る人の持つ観念は、外的現実から遮断されているのであるから、それがいかに「視覚的で客観的」であるように思われようと、外的世界の観念とは結局、別物であるという点に絞られるだろう。最後に言及されている「想起されるもの (le souvenir)」もまた、それがしかるべく形成され蓄積される場所を持たないがゆえに、その場限りのいいかげんなものとされる。したがって、エルヴェの夢のなかにでてくる観念、記憶、あるいは女性は、いわば得体の知れない粗雑な原料で作られた張りぼての人形のようなものであり、エルヴェはそうしたものを相手に空回りを踊っていることになる。しかしながら、エルヴェにとっては、その夢実験の唯一最大の目的は、相手の女性が現実の女性であろうがなかろうが、張りぼての人形であろうが、ともかく、女性が夢のなかに出てきて自分と踊りを踊ってくれることにあるのであるから、少なくとも、踊りを踊るためには、その舞台となる自分の心的活動だけは正常に働いてもらわなくては困るであろう。モーリのエルヴェ批判は、そういった内容空疎さを衝いているように思われる。ブルトンもまた、自分はいくまでこの領域に関して素人であるという留保をつけながらも、「心的活動は睡眠中にも継続的に営まれている」(*O.C.* II, p.114) という立場をとっているが、モーリのエルヴェ批判の正当性は認めている。これについては、後ほど再び取り上げる。

ちなみに、このモーリに批判されている人物に関しては、フロイトは、「《どんな奇異な夢にも、分析の仕方を知ってみれば、この上なく論理的な説明がなされるのだ》」(同書、p.89. *I.R.M.* p.62) というエルヴェ侯爵の言葉を引用しているが、どうやら前後の文脈から判断すると、フロイトは夢

形成のメカニズムについてはモーリよりもエルヴェの理解の方に分があると見なしているようだ。

二人の比較はここまでにして、これ以降、「時間」そして「記憶」(le souvenir) という問題について考えていきたい。それを直接浮き彫りにする夢、夢研究のなかでも飛び切り有名な夢について見ることにしよう。モーリの「ギロチンの夢」である。

IV-4. モーリの夢

さて、そのモーリの夢であるが、フロイトはそれを二度詳しくとりあげて、コメントを加えている。最初は、『夢解釈』の第一章「夢問題の学問的文献」にある、「C 夢刺激と夢源泉」(Les Stimuli du rêve et les sources du rêve) のなかにおいてである。この部分で、フロイトは、夢を形成する「素材」あるいは「材料」の一つとしての「身体刺激」を次の四つに分類している。「夢源泉を完全に列挙してみれば、結局、四つの種類が数えられる。それらはまた、夢それ自体の分類にも応用されている。第一は、外的な(客観的な)感覚興奮、第二は、内的な(主観的な)感覚興奮、第三は、内的な(器質的な)身体刺激、第四は、純粹に心的な刺激源泉である。」(『夢解釈 I』、p.39。I.R.M. p.29。傍点強調フロイト) モーリの夢はそのなかでも第一の「外的な感覚刺激」のなかで紹介されている。フロイトはモーリの著作『睡眠と夢』の該当ページを掲げ、その夢をこう要約している。「彼 [=モーリ] は病気をしてベッドに寝ており、脇の椅子に母が付き添ってくれていた。彼は夢の中であの恐怖政治の時代に生きていた。恐ろしい人殺しの場面をたくさん目撃した後で、彼はとうとう、自ら革命裁判所の法廷に引き出されるはめになった。そこには、ロベスピエールだの、マラーだの、フーキエ=タンヴィルだの、あの恐るべき時代の陰惨な有名人たちがいた。彼らに向かって釈明したりとか、思い出せないいろいろなことがたくさんあった後、死刑判決を下され、数知れぬ野次馬たちに取り囲まれて刑場に引立てられていった。階段を昇らされ、執行人は彼を板に縛り付けた。板が回転し、ギロチンの刃が落ちてきた。彼は自分の頭が胴体から離れるのを感じ、これ以上はないような強烈な不安でもって目が覚めた。すると、ベッドの上の部分が外れて落ちてきていて、彼の頸椎あたりの、ちょうどギロチンの刃が落ちてくるような場所に当たったのだということが分かった」(同書、p.45。I.R.M. pp.32-33)¹⁸⁾。周知のように、この夢が有名になってほうほうで繰り返し引用されるのは、夢イメージの直接原因となったと思われる外的刺激であるベッドの横板の一瞬の落下から、これだけ内容豊富な夢が生み出されるものだろうかという疑問が、ル・ロワやエジェという同時代の研究者たちから提示され、議論的になったためである。覚醒刺激 (= 板の衝突) と覚醒との間の時間が短すぎる、夢の長さとその原因との間に時間のズレがありすぎるというのである。あるいは、モーリはこの横板の落下によって目が覚めたのであるから、原因と結果 (= 夢) の順番が逆ではないかというものである¹⁹⁾。

この問題に関するフロイトの解決あるいは解釈は、もう一つの引用箇所、すなわち『夢解釈 II』の第 6 章「夢工作 (I)」の「二次加工」の部分で述べられている。ここでフロイトが問題にしているのは、まさにモーリの夢の「欲望成就」に関わることであり、フロイトの表現では、この時間と

因果関係が奇妙にねじれたモーリの夢は、モーリの「空想」(fantasme)の産物であるというのである²⁰⁾。つまり、フロイトの解釈では、ここで夢見られた内容は、夢となって実現する何年も前から、モーリの想起願望として用意されていたものであるという。それがたまたまある夜のベッドの横板の落下という偶然によって、夢となって現れた、つまりそれがモーリの欲望=願望を実現する、夢工作のなせる業なのである、と²¹⁾。フロイトはこう説明している。「あの恐怖政治の時代には、国民の精華である貴族の男女が、人間はいかに晴朗な心で死に就くことができるかを示し、また彼らの機知の新鮮さと生活様式の洗練とは、非業の死に至るまで失われなかった。そのような様々な描写に接して、一体誰が、そしてフランス人にして文明史家であればなおさら、心囚われずにいることなどできたであろうか。貴婦人の手に接吻をして別れを告げ、決然と断頭台に昇って行ったあの若者たちの一人になって、自分もそのただ中にいることを空想することは、いかに魅惑的であったことだろうか。あるいは、野心(ambition)がこの空想(fantasme)の中心動機であったとすれば、己の思想と炎の弁舌の力で、当時の人類の心臓が痙攣的に鼓舞されていたあの街を支配し、何千もの人間を信念を以て死に委ね、ヨーロッパの転変に道を拓き、その際には自分自身の首さえも安全でなく、ある日ギロチンの刃の下にその首を晒すことになるような、獐猛な人物たちの立場、そう、たとえば、ジロンド派の人々や英雄ダントンのような役に、自分を置いてみたりする、こんなことも魅惑的ではなかったはずはなかるう。モーリのこの空想がこのような野心に満ちたものであったこと、それは想起(sa mémoire)のなかに保持された『数知れぬ野次馬たちに取り囲まれて』という特徴が、指し示しているように思われる」(同書、p.276。I.R.M. p.423)。

ところで、ジャクリューヌ・カロワに言わせれば²²⁾、夢に現れる「空想」は、モーリのものではなく、フロイト自身の「空想」に他ならないというのである。まず、フロイトがモーリの夢の動機としてあげている「野心」(ambition)、つまり、フランス革命のような驚天動地の出来事のなかで、従容として死に赴く愛国的な勇気をフロイトはモーリに想像しているが、そんなものをモーリは持ち合わせていなかったという。『夢解釈』の第一章「夢問題の学問的文献」で報告されている夢は、『睡眠と夢』からの実際の抜粋であるが、第六章のこの部分、フロイトが要旨として語っている、「貴婦人の手に接吻をして別れを告げ、決然と断頭台に昇って行った」云々というエピソードは、『睡眠と夢』の著作のどこにも見当たらないという。しかも、『睡眠と夢』には、革命の恐怖時代の英雄たちとされる、ダントンやジロンド派たちの名前は一切でてこない。一方、ロベスピエール、マラー、フーキエ=タンヴィエといった名前が挙げられている、恐怖時代のジャコバン過激派をモーリはむしろ、「獐猛な人物たち」(toutes les plus vilaines figures) (モーリが著作の中で実際に使っている言葉)と見なし²³⁾、毛嫌いしていたというのである。

したがって、自分を歴史上の英雄に見立てるといふ夢の動機(=「野心」)は、ここでは成り立たない。カロワによれば、そうした「野心」や「空想」はむしろ解釈者フロイト自身のものであり、少なくともモーリにはあてはまらない。フロイトによるモーリのギロチンの夢は、「優雅と英雄を好み、ジロンド派信奉者の、18世紀のフランス人に典型的な幻想」であり、フロイトはモーリの夢に

そうした幻想を重ね合わせることによって、「モーリとともに (avec) 夢見ているのではなく、モーリの代わりに (à la place de) 夢見ている」たのである²⁴⁾。解釈者が夢の内容に魅惑されて、客観的であるべき分析を忘れて、その夢のなかに入ってしまうことは (あるいは感情的にその夢に反抗することは) しばしば見受けられることであるだろう。

ブルトンもまた当然このモーリの夢に言及しているが、エルヴェ最頂のブルトンは、モーリを神やその世界創造を信じる宗教的狂信者であるとして激しく罵倒しながらも、この夢は、「夢の記憶の持つ錯覚的性格 (le caractère illusoire du souvenir du rêve) を明らかにした」(O.C. II, p.112) とある程度評価しているかのように書いているが、それが意味するのは、モーリがこの夢の報告したのは、その夢自体を見てから何年もたった後であるため、「このような『不正確な』記憶 (mémoire) への依拠、長いあいだ経た後の彼の証言を盲目的に受け入れること等々には、何らの正当な根拠もないであろう」(O.C. II, p.113) ということなのである。つまり、何年も前の古い記憶で再現された夢は、それ自体内容が疑わしく、検討するに値しないということである。しかもここでブルトンが挙げている理由は、モーリが、第二帝政下の反動家であり、ロベスピエールであれマラーであれ、フランス革命に加担した人物は誰でも「獰猛な人物たち」として敵視していたという (またしても!) 思想的・イデオロギー的理由のほうが大きい。

しかしここでモーリに浴びせているブルトンの批判は、一考に値するであろう。昔の夢、つまり古くなった記憶は、それを夢として検討するに足りないものであろうか。では、どこまでが夢として使える記憶で、どこからが使えないものとなるのか。要するに、夢とその材料となる記憶との関係はどのようなものであるのか。あるいは、(古かろうが新しかろうが) ある記憶を睡眠中に想起することによってできる夢、その「記憶」と「想起」のメカニズムはどのようなものなのか。

これは少し見方を変えるなら、そのままブルトン自身に跳ね返ってきかねない批判でもあるだろう。というのも、われわれが『通底器』I で読むブルトンの夢は、先に見たように、夢見られた瞬間から一冊の本にまとめられる過程にいたるまで、さまざまな時間的間隙や発表のプロセスを経てきており、最初の夢とは同じであるという保証はどこにもないからである (その意味では、ブルトンの夢も、ある意味では古い記憶でできた夢と言えなくもないであろう)。というより、もともと、ブルトンが見た夢そのままの夢をわれわれは見ることができないのは言うまでもないことだが、もっと深刻なのは、イメージから言語へと、表現方法を変更され、加工された夢をわれわれが読むとき、そうした疑念は到底ぬぐい切れるものではない。

ところで、フロイトは、モーリの夢の持つ欲望、夢思想を上記のように (拡大?) 解釈したのだが、モーリが目覚める直前にギロチンの夢を見たメカニズムについては、こう述べている。

目覚めの夢と言われるものは、外界からの感覚刺激を、眠りを続けることと両立するように加工して夢の中へと織り込んでしまう。そして、外界に向かうべしとする通告としての要求を、感覚刺激から奪う。こうした目覚めの夢にあっては、眠り続けようとする欲望の働き具合を見て取るのは最も容易である。しかしこの

眠り続ける欲望は、それ以外のどのような夢においても、すなわち、内面から睡眠様態を揺さぶって覚醒させようとするような夢が出現を許されるにあたって、やはりその役目を果たしているのではなくてはならない。夢があまりに忌まわしいものになってきたときに、それでも相当数の場合にVbw〔前意識〕(le préconscient) が意識に向かって伝えること、それは、放っておいて眠り続けろ、それはやっぱり夢に過ぎない、ということである。(『夢解釈Ⅱ』、pp.368-369、*I.R.M.* p.486)

つまり、ベッドの横板が落ちてモーリに恐怖の夢内容を見させ、モーリを起こした夢は、その夢自体が、まだ眠れという前意識の送るサインだというのである。とすると、モーリを起こした刺激は、時間のズレにもかかわらず、やはり夢の源泉であり、モーリの夢(その内容や記憶とはともかく)の真正さは保証されるということなのか。さらに興味深いのは、この指摘のすぐ後に、先に見た、エルヴェの「明晰夢」、夢を見ている夢が、眠りを命じる「前意識」の例のヴァリエーションの一つとして言及されていることである。

V-1. 夢に対峙することの意味

ここでフロイトのひそみに倣って、最後の疑問を呈してみたい。夢の根本に触れる疑問であり、場合によっては、夢そのものをも否定しかねない疑問である。しかも、これは、本来、問題に着手する最初の瞬間に発せられなければならない類の疑問である。フロイトによれば、夢ないし夢の解釈に対する疑義は次のようなものが多く、フロイトもまんざら不賛成ではないようなのである。「われわれが解釈しようとしている夢を、そもそもわれわれは知ってはいないのである、より正確に言えば、われわれは、夢が実際に発生したとおりに夢を知っているという保証をまったく持っていないのである」(『夢解釈Ⅱ』、p.294。*I.R.M.* p.437)。

どうということか、フロイトの記述に従ってまとめてみる。

第一に、「われわれが夢から想起(souvenirs)することがらは、そして、そこにわれわれの解釈技法を働かせようとしていることがらは、(……)われわれの記憶(mémoire)の不実さによって損なわれている。われわれの記憶は、夢を覚えておくということについては、特別に高度に能力がないように見え、ひょっとするとまさに夢の内容の最も重要な部分をだめにしているかもしれない」(同書、*Ibid.*)。われわれは、目覚めた後に夢を断片的にしか思い出すことができない、睡眠中に見た夢は想起されるものよりずっと豊富で内容が多かったはずだという印象をよく持つが、これはまさにそれに該当するであろう。

第二に、「あらゆる点から見て、われわれの想起(souvenirs)は、夢を単に欠損の多い形で出してくるというだけではなく、実直でなく変造された形で出してくるということも言える(……)またわれわれが、夢を再生しようとする際に、もともと何も無かったことによって、忘却によってできた穴を、任意に選ばれた新素材で埋めたり、夢の実際の内容がどういふものであったかをもはや判断できなくなるまでに、夢を潤色したり丸めたり仕立て上げたりするのではないかということも

疑える」(同書、pp.294-295、*Ibid.*, p.436)。こうしたフロイトの文章を読むと、われわれが従来から抱いている夢の価値に対する疑惑の念(夢は単なる幻や無なのではないかという)がますます深まるように思われる。すると、そうした夢を対象とする夢の解釈や分析の根拠と正当性そのものが失われる危険性がでてくる。夢が「夢の作業(夢工作)」といった、検閲を蒙り歪曲されてできた形成物であることを知っているとはいえ。そしてまた、夢を解釈するという試みは、不注意や思い込みによって、夢に余計な付加物、新素材を付け加え、夢をさらに歪ませてしまうという可能性を排除できないことになる。

さらに加えて、フロイトはこうも言っている。「分析を行うたびごとに、まさに、夢のこまごまと些細な特徴こそが、解釈にとっていかに欠かすべからざるものであるかということが実例によって明らかになり、また、このような特徴に注意が向けられるのは後になってからだということのためにどれほど課題の解決が滞るものであるかが、明らかになってくることであろう。われわれは夢解釈にあたって、夢がわれわれに見せている言語的表現のそれぞれのニュアンスに、等分の評価を差し向ける」(同書、p.296、*Ibid.* p.437.下線強調引用者)。真実は細部に宿るという言葉は、夢解釈にも言えることであり、フロイトは夢を解釈するときにはことさらに、夢内容の細部に注意を払った。これは「言語的表現」にもあてはることであり、夢のなかで些細な場所にあるが強い印象を与えるイメージや「ことば」、あるいは人物が発する不自然な言葉遣いや「言い間違い」には、夢の意味を解く鍵となる重要なメッセージが含まれていることが多い。

ともあれ、この三つのフロイトの発言をまともに受け取ると、われわれは、自分の夢であれ、他人の夢であれ、夢そのものを余計で無意味なものとしてまともに扱うことができなくなってしまふ。ましてや、夢の分析や解釈は、しばしば、そうした些細に思われる言葉に注目することによって夢の意味のありかを発見することで成り立っている作業であるから、そもそもそうした試みは最初から破綻していて、成立しないことになる。

では、夢を見ること、そしてそれを解釈することは、まったく無駄なことなのだろうか。さらには、夢を見る時間、それを分析する時間や作業は、どうなるのだろうか。

そうではない、とフロイトは断言している。夢の矛盾について、フロイトはこう説明している。

夢の発生についてわれわれが新たに獲得した洞察から見れば、矛盾は余すところなく統一的にもたらされる。われわれが夢を再生しようとするとき、夢を歪曲してしまうことは間違いない。われわれはそのことを、次のように印づけてみた。すなわちそこに見られるのは、正常な思考の審級による、二次的な、そして誤解されがちな、夢の加工なのである。しかしこの歪曲も、それ自体が加工の一部であって、夢思想は、夢検閲のために、規則的にその加工に服しているのである。諸家はここで、夢歪曲の部分が顕在的に働いていることを感じ取り見て取った。しかしわれわれは、そこにはそれほど拘泥しない。というのも、われわれは、隠された夢思考からしてすでに、はるかに大がかりな歪曲工作、しかも捉えにくい歪曲工作が、その夢を対象として選んでいたことを知っているからである。諸家の誤解しているのは、ただ次の点のみである。

すなわち彼らは、想起される時と言葉で文章化される時に夢が修正されるということを、恣意的なもの、だからそれ以上はもう解き明かしようのないものであって、それゆえ夢の認識にあたってわれわれを誤りに導くものであると受け止めているのである。彼らは、心的なものの中での決定ということ、過小に見積もっている。そこには何ら恣意的なものはない。第一の思考の筋で未決定のままに置かれた要素の決定を、第二の思考の筋がただちに引き受けるということは、普通に見られる。たとえば私は、一つの数字を恣意的に思いついてみようとする。しかし、それは可能ではない。私が思いついた数字は、私のうちの思考、つまり私のその時々々の意図からは遠くにある思考によって、一義的にそして必然的に、決定されているのである。同様に、覚醒による編集作業によって夢が蒙る変更も、やはり恣意的なものではないのである。その変更は、変更によって置き換えられた内容と、連想的な繋がりを保っているものであり、その内容への道をわれわれに示すのに役立つのである。またその内容自体も、再び別の内容の代替物であるかもしれない(同書、pp.297-298, *Ibid.*, pp.437-438)。

われわれが目覚まして想起する夢は、もともと歪曲を含んでいる。これは夢が夢思考から、夢内容となって現れるうえで、避けることのできない歪曲である。それが「夢の作業〔夢工作〕」の働きの効果である。われわれが思い出すときに漠然と感じる、夢につきものの修正、欠落、忘却、時間的ズレ、われわれはそれらを疑うが、夢はそれらすべてを含んでこそ本物の真正の夢なのである²⁵⁾。だから逆に、そうした夾雑物を一切含まない純粋な夢と思われているものの方がまがいのもの、不自然な夢なのかもしれない。これはわれわれが夢を語ったり、記述したり、分析したりするときも同様である。そのとき夢には、変更、修正、欠如が加えられるのであるが、それはフロイトの言葉を借りるなら「恣意的なもの」ではなく、むしろ「心的なものの中で」決定された必然的なもの、夢そのものが求める歪曲である。したがって、われわれが夢に触発されて、連想する思考や言葉や数字は、夢の代替物かもしれないが、夢の論理や要請に則って呼びよせられる代替物である。ここには、心的活動や夢に恣意的なものを拒む、フロイトの決定論者としての顔がのぞかしている。これをあまりに極端な立場と取るかどうかはさておき、こうしたことを了解しておくなら、われわれは、今までよりは少し安んじて、夢の物語、夢の記述、夢の分析に耳を傾け、それを読むことができるのではないだろうか。

それと同時に、ここに至ってわれわれもようやく、本論の主題を扱うにあたって、最初からわれわれにまわりついて離れなかった疑念を少しは掃うことができるであろう。その疑念とは、もちろん、夢を扱うときに必ずといっていいほどつきまってくる問題である。繰り返して述べてきたように、ブルトンが見た夢から始まって、ブルトンがそれを記述し、説明を加え、分析をする。そして『通底器』という書物にまとめ出版する。その間には、さまざまな手続きと時間が当然、費やされることになる。そうすると、こうした一連の段階を経てきた後に読まれる、『通底器』のブルトンの夢は、果たして、最初のオリジナルな彼の夢そのものであるのかという疑念である。ブルトン自身にそうした意図がなくとも、記述や分析や出版という段階を経ていくごとに、夢に修正や変更

や、さらには欠如をもたらすことは避けがたいことである。そうするとブルトンのオリジナルの夢はどこへ行ってしまうのか。さらに、そこにブルトンの夢を分析しようとするわれわれの操作がそれに覆いかぶさっていく。自分の夢でさえ解釈が難しいのに、他者の夢を扱うことの正当性はいかに保証されているのか。第三者が分析して作り上げた夢は、元の形とは似ても似つかないともない怪物に変貌しているのではないか。この二つの点の最初の疑問は、フロイトによって解決の糸口が与えられているように思われる。いかにブルトンが夢に修正や加工を加えようとしても、それはブルトン自身の(夢の)欲望によって要請された、「恣意性」を免れた「代替物」でしかありえないのである。眠っていようと、起きていようとそのことに変わりはない。夢、あるいは無意識にとっては、心的活動の働きとそれによって形成されるものは時と場所を選ばないからである。次に後者の問題、他者による夢の扱いについてであるが、これについては、フロイトが『夢解釈』の冒頭で警告していたことを遵守する他はないだろう。困難や利己的な誘惑を退けて、忠実で真摯な「自然研究者」(homme de science)としてブルトンの夢に対峙すること、可能な限りの「共感」と「友愛」を持ちながら。

V-2. 夢はどこへ向かうのか？

フロイトとブルトンでは、夢の「時間」にかかわる問題に関して、真っ向から対立する見解がある。それが、夢は〈未来〉を指向するか否かという問題である。これはもちろん、古代人や未開人が考えるような、なんらかの外部の神秘的な存在や力が働いて、夢のなかに入り込み、未来の出来事を予言して、未来を告げ知らせる予知夢が現実存在するというわけではない。フロイトは、『夢解釈』の最後でこうきっぱり言い切っている。「では次に、未来を知ることについて、夢の価値はいかほどのものか。もちろんそのようなことは考えることもできない。それに代えて、過去を知ることについてはどうか、と考えよう。というのも、どのような意味においても、夢というものは過去に由来するからである。とはいえ、夢はわれわれに未来を示しているのだという古くからの信念にも、真理がまったく含まれていないわけではない。夢はわれわれに、欲望を成就したもとして表象させてくれるのであるから、その意味ではやはり、夢はわれわれを未来へ導いているのである。しかし、夢見る人によって現在のこととされたその未来は、不壊の欲望によって、往時の過去の姿そのままに象られているのである (mais cet avenir, présent pour le rêveur, est modelé, par le désir indestructible, à l'image du passé)」(『夢解釈Ⅱ』 pp.427-428, *I.R.M.* p.527)。すでに見てきたように、フロイトによれば、夢を形成する材料は、「前日の印象」、「些細な印象」、「幼年期の記憶」とすべて多かれ少なかれ「過去」に属するものであった(『夢解釈』、第5章「夢の素材と夢の源泉(A)」を参照のこと)。フロイトも「欲望の成就」としての夢の未来をまったく否定しているわけではない。「夢はわれわれを未来へ導いて」いくのであるから。しかしながら、その夢、すなわち「夢見る人によって現在のこととされたその未来は、不壊の欲望によって、往時の過去の姿そのままに象られて」作られたものである以上、フロイトの考える夢はやはり「過去」のコ

ピー、ないしはその繰り返しの域を出ないであろう²⁶⁾。

しかしながら、ブルトンはそのフロイトを激しく批判する。

フロイトは予言的な夢 (rêve prophétique) の存在を否定する結論を出した点で明らかに過ちを犯している——予言的な夢というのは直後の未来に関わる夢 (rêve engageant le futur immédiat) という云である (O.C. II, p.111)

ここでブルトンは、言葉としては「予言的な夢」という表現を使っているが、もう一度確認しておく、それは、神や巫女が下す託宣の類ではなく、ここにあるように、直後の未来を《engager》(参加させる＝巻き込む＝賭け金とする等々、といった、この動詞が持つほぼすべての意味における) する夢をそう呼んでいる。その理由として挙げているのが、「夢をただもっぱら過去の姿を暴き出すものとのみ考えるのは、運動というものの価値を否定することになることになるからである」(O.C. II, p.111) というものであるが、これはマルクス主義的な唯物論的弁証法のことをさしているであろう。またもや思想・イデオロギーを引き合いに出して、それも一理あるであろうが、われわれが考えるところでは、〈未来〉を志向しようとするブルトンの本当の理由はそこにはないであろう。強いて「運動」という言葉にこだわれば、ブルトンが次のように言っている意味における、運動であろう。

夢は最も命令的な形で、私の過去のもっとも消化しにくい部分を排除するよう私を誘い (m'engage)、言うならば私のためにそれを排除してくれているのだと言ってよい。私はここで夢の主要な有効性を確認する。夢は、ある人々がそう信じ込ませようとしてきたような空しい愉楽ではなく、たんなる傷の治癒以上のものでさえあって、運動という語の最も高次な意味における運動、すなわち人を前方へと導く現実的矛盾という純粋な意味における運動なのだ。(O.C. II, p.135.)

この文章にでてくる「現実的矛盾」という言葉は、シュルレアリスムを最もよく体現した表現、『シュルレアリスム第二宣言』、そして本書でも出てきた表現を想起させる²⁷⁾。

さて、ブルトンがこれほど〈未来〉にこだわる理由は、いまさらくどくと述べる必要はないであろう。われわれはすでに当時のブルトンを苦しめていた状況、それが反映されていた夢(ブルトンの解説・分析つきの)をすでに詳細に見ているのである。この時期はブルトンの人生にとって公私にわたってもっとも辛く険しい時期の一つであった。夢から判断すると、1926年末に決定的に別れたはずのナジャに対してブルトンはまだ良心の呵責と迫害妄想めいたものを抱いており、それを償うはずのシュザンヌ・ミュザールとの恋愛の破局は修復不可能なものとなっていた。それに追い打ちをかけるように迫る経済的困難。一方、一時は政治的共闘を考えていた共産党との関係も悪化の一途をたどり、結局、共同活動は立ち消えになってしまう。さらには、1929年に迎えた危機

以来、再出発を余儀なくされたシュルレアリスム運動とグループの立て直しの作業が残されていた。ブルトンにとって、今後の活動の方針はまだよくつかめていない。絶望と不安にかられ、未来の見通しも全く見えないブルトンのこの頃の様子と生活は、『通底器』Ⅱで描かれている通りである。この時期、ブルトンは文字通り「現実的矛盾」を生きていたのだ。

そして、おそらく、ブルトンに残された、こうした四面楚歌の状況を打破する唯一とっていい方法、それが夢を見ることだった。そのブルトンの夢は、明らかにその向かう先として、〈未来〉を志向している。これらの諸矛盾を解消できるのは、〈未来〉という時にしかありえないのである。

したがってわれわれの最後の作業は、未来に賭けていくブルトンの欲望が、夢のどこにどのように刻印されているかを探ることにある。

V-3. 「それが本書である」(Il s'agit du livre présent)

ブルトンの夢の最後の部分を読み返してみると、そこには諸問題を解決して、新たに出発しようとする彼の意志が読み取れる箇所がある。最後のパラグラフである。

私は右の方に百八十度向きを変えている。別の売り場に、カシヤンのような体つきの一人の共産党員がいる。彼は、私が近々することになっているらしいドイツ旅行について、何か含むところありげに私と話す。私はかなりご満悦である。(……) 明日出発だ (On part demain)。ついさっき少しばかり金を手に入れることができうまい具合だな、と私は考える。(……) 私が講演をせねばならぬ場合には、書きはじめようと絶えず考えていた本のための種々の材料 (les éléments du livre) を、その講演のテーマに利用しようと私は考える。(O.C. II, p.120)

すでにこの夢の分析は、以前済ませたので²⁸⁾、大筋だけ辿っておくと、共産党とのいざこざに正しい決着をつけ(「右の方に」方向転換し、共産党を代表するカシヤンに別れを告げ)、ブルトンは、懸念材料だった経済的困難を救う少しばかりの軍資金を携えて(「金を手に入れる」)文字通り新たな「出発」をしようとしている。そしてその出発は、講演のためのドイツ旅行であり、その講演のテーマに使える、書きかけの本がある。だから、ブルトンは、非常に機嫌がよい(「私はかなりご満悦だ」)。そして何よりも大切なのは、このパラグラフの最後に、ブルトンが、こう自注をつけていることである。

*それが本書である (Il s'agit du livre présent)。

つまり、講演のテーマに使おうとしている材料が、後に『通底器』としてまさに現実化されていくのである。

そして、ブルトンは、夢のこの部分を次のように分析している。

講演のテーマ。これは、不意打ちを食いたくない、私のさまざまな関心 (mes diverses préoccupations) を客観的な場面で矛盾なく和解させたいという私の欲望 (mon désir) を示しているが、この欲望 (ce désir) はしだいに激しくなり、私がかかなり以前から延ばし延ばしにしていたことを悔やんでいるある仕事にただちにとりかかることを要請している (O.C. II, p.134)。

明らかにここにブルトンの欲望の中身がどのようなものか、明瞭に説明されている。まず、この「分析」のテキストで注目されるのは、「欲望」という語が二度使われている点である。この欲望は、一方では、ブルトンのさまざまな「関心」、つまり知的・心理的面で心配事、矛盾に決着をつけたいという欲望であり、他方では、仕事を完成させる欲望である。仕事とはもちろん、新しい主題を含んだ一冊の本を完成させることである。ところで、夢、あるいは夢の記述のなかに、ブルトンの「欲望」というものがもし刻み込まれているとすれば、それは、ここではない。この「講演のテーマ」の部分は、欲望がどのような内容のものかを説明するものであるかもしれないが、ブルトンの「欲望」そのものが刻印されているのはここではない。むしろ、その刻印は、夢のテキストに注として付けられた一句、「それが本書である」(Il s'agit du livre présent)、ここであろう。以下、夢の記述において、その欲望がどのような働き、機能を果たしているのか見ていきたい。

フランス語で「本書」という表現は、《livre présent》で、ここで使われている「本」(présent)を表す形容詞は、また「現在の」、「現在形の」という意味にもなる。しかも、明らかにこの注が書かれたのは、ブルトンが夢を見ている最中ではなく、「現在」であり、時間的なズレがそこに認められる。また、この注が占めるその位置も微妙かつ重要であるように思われる。「本書」という注は夢の内容(材料)に属しているが、そこに完全に同化している訳ではない。夢を中心として見ると、「本」(présent)は注の場所へ「置き換え〔遷移〕」(déplacé)られているということによって、いかなれば夢の外縁ぎりぎりのところで夢に接している。逆に、夢の記述あるいは『通底器』から見ると、それは夢の形成を補佐する役割の一端を担っており、夢の文章にもあるように、「本の材料」(les éléments du livre)を提供している。夢と書物という、いわば中身と容器の両方の役を演じていて、それらの内部と外部の位置にあるという意味では、この注はジェラルド・ジュネットの言う意味での「パラテキスト paratexte」に他ならず、その機能を見事に果たしているように思われる²⁹⁾。そして、ジュネットによれば、パラテキストの一つである「注」(note)の特徴は、「注が提供するすべてのもの——さまざまに変化する音域、読みの義務における諸段階、反転と逆説的転換(本質は注にある)の可能性——にこそ、大作家を含むあれほど多くの作家たちが注を手放そうとしなかった理由があるのだ。注はたしかに、テキストの病かもしれない。しかしそれは、他の病と同じく、『正しい使用法』のありうる病なのである」³⁰⁾。

それではジュネットが指摘している、注の多様な病、その症例をいくつか検討してみよう。

まず、すでに述べたように、この注のパラテキストは、その位置(あるいは「境界」(frontière))として、夢記述のテキストの一部としてその内部に属しているが、それが注として欄外に「置き換

え〔遷移〕られているために外部にもあるともいえる。そしてこの注は、夢から『通底器』へ、あるいは逆に『通底器』から夢へと移動を可能にする通路の役割を果たしているであろう。この通路を通過することによって、例えば、夢を形作っていたはずの「材料」は、夢の「材料」であり続けながら、同時に、その外部のテキストである『通底器』の「材料」ともなることもできる。変化と不変化を同時に可能とする魔法の装置とも言えるのである。しかし最も奇妙で不思議なのは、まだ完成していないうちから、それが「本」つまりは『通底器』の「材料」として夢のなかに現れていることである。しかし、いずれにせよ、夢のなかに、後年『通底器』となるべき運命の「本」がすでに現れていて、ブルトンがその完成に腐心し、今後の活動をそれに賭けていたという事実は消せないだろう。これは時間軸から見た場合、この注の最も矛盾した、逆説的で病理学的な性格であろう。

そしてまた、「本書」(livre présent)に付されている形容詞「現在の」(présent)であるが、ここで使われている例に相当するように、慣用的表現として名詞に伴い「今現在問題になっている、今この瞬間行われている」という意で使われる³¹⁾。また本来の時間・空間に関する意味においては、「今」、「現在の」、あるいは「(ここに)いる、在る」、「出席している」として使用される。ところで、注に戻るなら、この《présent》はいつのことを示しているのであろうか、あるいはさらに重要に思えるのは、この語がブルトンによって「いつ」注に付けられたのかという問題である。というのも、この注が付けられたのは、どう考えても、『通底器』が完成される瞬間でしかない。とすると、ブルトンの「欲望成就」がなされた瞬間は、原稿にこの注が書き込まれた時ということになる。これはフロイトの定義、「夢は、一つの欲望成就として認識される」(『夢解釈 I』、p.164)に反する。パラテキストたる注のもう一つの奇怪な病理学的症候。そうすると、それまで経てきた過程は、どう考えたらいいのだろうか。夢を見ている夜、それに説明と分析を加え、紆余曲折を経て、一冊の書物として完成されるまでに至るまでのあいだ、欲望はどこをどう彷徨っていたのであろうか。

あるいはこう考えられるかもしれない。欲望は、夢のなかだけでは完全に成就されず、その後もし生き残って、夢が説明・分析されているあいだ、そして書物となってその居場所を見つけるまで待機状態にあったのだ、と³²⁾。そして欲望が成就されるのは、夢実例を内に含み持った夢について書かれた「本書」(livre présent) = 『通底器』の完成の瞬間であると。その時、「過去」に見られた夢、施されてきた分析、準備を要した書物、これらすべては「現在」において合致する。「過去」と「現在」が会うのである。そうしてまた、この出会いの時間の「運動」において、欠けていたもう一つの時間、「未来」が当然、呼び求められる。「それは本書である」というこの些細な注は、こうして、欲望を過去から現在へ招来し、そして現在から未来へと差し送るファクターとして働く。

夢という内的時間、現実という外的時間を同時に生きて、そのあいだで引き裂かれ、もがき苦しむブルトンにとっては、その矛盾を乗り越えるために、時間的・空間的に、過去と現在と未来を結びつける「一本の導きの糸」(O.C. II, p.164)であるテキストを書くことがどうしても必要だったのである。それが夢を主題とした『通底器』である。

以上のように見てくると、「それが本書である」(Il s'agit du livre présent)という注の位置に置

かれた些細で目立たないパラテキストがブルトンの欲望が刻印された点であり、かつ『通底器』という書物の中心でもあることが理解できるであろう。

おわりに

以上、ブルトンの夢と作品『通底器』を検討して、ブルトンの欲望成就がテキストのどこに刻印されているのか、なぜそのような形（注というパラテキスト）をとらざるをえなかったのかを見てきた。われわれがここで試みたブルトンの夢の解釈、『通底器』というテキストの見方が唯一正しいものであると主張するつもりは毛頭ない。フロイトも言うように、夢の解釈には「多元決定」が常につきまとい、他の多様な解釈が可能だからである。それにまた、フロイトによれば、夢にはどうしても解きほぐせない「臍」（ombilic）があるのだという（『夢解釈 I』、p.151。I.R.O.C. p.146）。われわれは今回の論考で、ブルトンの夢のこの「臍」につき当てていないことを望むのみである。

ただ少なくとも、この『通底器』という作品が、ブルトンの生涯のなかでも、他の作品に比べて、とりわけ大きな意味を持っていたことは確かである。後年、ブルトンはこの頃のことについて『対談』（1952年）のなかで触れ、こう回顧している。

私から見て、今日なお『通底器』は、初期において私自身の動揺の原因となったいくつかの矛盾を、そしてまた、私の内的生活の心をかき乱すいくつかの試練をも、乗り越え克服することに成功した瞬間をしるしています。（O.C. III, pp.538-539）

『通底器』がブルトンの内面的動揺の克服、そして運動のその後の進展に与えた役割は大きいこと言えよう。ブルトンが生涯かけて探求していたシュルレアリスム、あるいは＜超現実性＞は夢と現実の出会いと対立のなかでもたらされる。そもそも、最初に触れた『第一宣言』には以下のような未来へ託された一節があった。

私は、夢と現実という、外見はいかにもあいられない二つの状態が、一種の絶対的現実、いってよければ一種の超現実（surréalité）のなかへと、いつか将来、解消されていくことを信じる（O.C. I, p.319. 下線強調引用者）。

しかしながら、われわれの課題はまだ残されている。

ここで取り上げたブルトンの夢は、多く存在する夢のなかの一つにすぎない。まだ他の夢を取り上げ、検討したなら、別の側面が見えてくるかもしれない。他にも論じ尽くされなかったテーマはいくつかある（夢の「記憶」と「想起」の関連など）。それにブルトンの夢理論には、しばしば矛盾が見られるし、その後、変化もしている。何よりも問題なのは、フロイトの夢理論との整合性である。論中でも取り上げたが、フロイトの夢理論、あるいは学説は、一切の恣意性や偶然を排除す

る、決定論に貫かれている。何よりも「自由」を求め、この後「客観的偶然 (hasard objectif)」という重要なシュルレアリスムのテーマ発見し追求していったブルトンは、フロイトとどう折り合いをつけるのか。あるいは、やはり、論争を続けるのか。検討は、今後の課題としておきたい。

注

論文中のアンドレ・ブルトンの著作からの引用は、特別な指示がない限り、André BRETON, *Œuvres complètes*, tome I, tome II, tome III, tome IV, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988-2008に依拠しつつ、O.C. と略記し、引用の末尾に巻数とページ数のみを付した。

特に『通底器』(O. C. II, pp.101-215)に関しては、邦訳は主なものとして以下の二冊がある。

a) 『通底器』豊崎光一訳、『アンドレ・ブルトン集成1』人文書院、1976 に所収。

b) 『通底器』足立和浩訳、現代思潮社、1978。

本論の引用にさいしては、主にb)の引用を使用させていただいた。発行が前者より後であること、そして特に『通底器』の本文において、ブルトンが取り上げているフロイトの著作『夢解釈』の該当箇所を注に付し、比較・検討しているために、非常に使い勝手が良い。もちろん必要に応じて文章を変更したことがある。

また、ブルトンの伝記的記述については、以下の文献に負うところが多い。

Marguerite BONNET, *André Breton Naissance de l'aventure*, José Corti, 1988.

Henri BEHAR, *André Breton Le Grand Indésirable*, Calmann-Lévy, 1900 [アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997]

Mark POLIZZOTTI, *André Breton*, Gallimard, 1999.

André BRETON, O.C. t. I と t. II の《Chronologie》の部分。

André Breton – La Beauté convulsive, Centre Georges Pompidou.

Dictionnaire André Breton, sous la direction d' Henri BEHAR, Classiques Garnier, 2013.

さらには、フロイトの著作についてであるが、前回同様、仏訳と邦訳は以下の版を使用した。フランス語訳としては、

c) Sigmund FREUD, *L'Interprétation des rêves*, traduit en français par I. MEYERSON, Nouvelle édition augmentée et entièrement révisée par Denise BERGER, Presses Universitaires de France, 1996 (1^{ère} édition: 1926, Nouvelle édition révisée: 4^e trimestre 1967) (以下、I.R.M. と略記)。

d) Sigmund FREUD, *Œuvres Complètes IV, L'interprétation du rêve*, PUF, 2003 (以下、I.R.O.C. と略記)。

e) Sigmund FREUD, *L'Interprétation du rêve*, traduction inédite par Jean-Pierre LEFEBVRE, Seuil, 2010がある (以下、I.R.L. と略記)。

日本語訳としては、

f) フロイト『著作集2 夢判断』高橋義孝訳、人文書院、1991。

g) 『フロイト全集4 夢解釈I』新宮一成訳、岩波書店、2007、そして『フロイト全集5 夢解釈II』新宮一成訳、岩波書店、2011を参照した(以下、前者は『夢解釈I』、後者は『夢解釈II』と略記する)。

また英訳としては、

h) *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Volume IV (1900), The Interpretation of Dreams (First part)*, London, Vintage, 2001 (1953)、そして *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Volume V (1900-1901), The Interpretation of Dreams (Second Part) and On Dreams*, London, Vintage, 2001 (1953) も参照した。

なお、本論中では、仏訳はc)を、邦訳はg)を主に使用した。仏訳はやはり、後年おおはばな改訂がなされているとはいえ、ブルトンが直接参照した仏訳の改訂版であるからである。邦訳のほうは最新の翻訳であり、ドイ

ツ語の各種のフロイト全集、そして、娘のアンナ・フロイトも関わった権威ある英訳の The Standard Edition (h)) の情報をも注釈に盛り込んだ、非常に完備された版になっている。したがって、本論を通してフロイトの著作は『夢解釈』というタイトルに統一することにした。『夢解釈』の新訳は、訳文の完成度を上げることはもちろんであるが、同時に用語も刷新しようという画期的な試みの翻訳である。

しかしながら、本論の記述のなかでは不必要な混乱を避けるために、夢に関する基本的な専門用語は、g)で採用されている用語ではなく、それ以前の既存の定訳を採用した(その際には、g)の用語もできるだけ記載するようにしたが)。専門用語に関しては、基本的に、フランスで出版され、広く親しまれ使われている、以下の二つの辞典・事典に基づいた。

- i) ラブランシュ / ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1995 (1977) [J. LAPLANCHE -- J.-B. PONTALIS, *Vocabulaire de la Psychanalyse*, Quadrige / Presses Universitaires de France, 2002]。
 - j) 『精神分析事典』R・シエママ編、弘文堂、平成7年 (Roland CHEMA, Bernard VANDERMERSCH, *Dictionnaire de la Psychanalyse*, Larousse, 2009)。
- もちろん、仏語・日本語ともに、必要に応じて、他の文献を参照したことは言うまでもない。

- 1) 「私はここで夢解釈の記述を試みるにあたり、神経病理学の関心の範囲を踏み外さなかったと信じている。なぜなら、心理学的に検証してみれば、夢というものは、異常な心的構築物 (formations psychiques anormales) の系列の中の最初のものであって、この系列をさらに辿ってゆくならば、ヒステリー恐怖症、強迫表象、そして妄想表象へと続くことが見えてくるからである。」(『夢解釈 I』、p.4。I.R.M. p.1)。
- 2) フロイトは『夢解釈』の第1章「夢問題の学問的文献」の冒頭で次のように断言している。「夢を解釈することを可能にする心理的な技法があり、その方法を適用してゆけば、あらゆる夢は、意味のある心的形成物としての姿を現して、覚醒生活の心の営みのうちの然るべき位置にしっかり組み込まれるようになる。この本の中では、まずそのことを示したいと思っている」(同書、p.13。I.R.M. p.11)。
- 3) 「主体の生活中におこる事件で、それが強烈であること、主体がそれに適切に反応することができないこと、心的組織のなかで長く病因となり続けるような混乱やその他の諸効果をひきおこすこと、等によって定義づけられる。/経済論的用語でいうと、外傷の特徴とは、主体の許容度と、刺激を精神的に支配し加工する能力に比べて、そこに集まる刺激の量があまりに多過ぎるということである」(ラブランシュ / ポンタリス『精神分析用語辞典』、前掲書、p.47、「外傷(心的外傷)」の項。)
- 4) ラブランシュ / ポンタリス、同書、「抵抗」の項参照のこと。
- 5) フロイトも『夢解釈』の初版の「緒言」でそのことを認めている。「私が夢解釈を説明してゆくにあたっての素材は特殊なものであって、そのことは、私がこの本を公にするのを困難にした。文献の中で語られている夢を取り上げたり、知らない人から夢を集めたりしても、そもそも私の目的には役に立たなかったわけであるが、その理由は私がこの本でとっている行き方からおのずと明らかになると思う。私は自分自身の夢と、私のもとで精神分析治療中の患者の夢から選ぶしかなかった。患者の夢においては、夢過程は、神経症的な特性の混入によって、望まれない修飾を蒙ってしまっている。そうした条件を考慮する必要があるときには、患者の夢を用いるということは控えなければならなかった。そうは言っても、私自身の夢を報告するとなれば、私は、自分が思う以上に、また詩人ならぬ自然研究者 (homme de science) である著者としての務めを越えて、自分の心的生活の内密なことがらを、見知らぬ人々の視線に晒すことが避け難くなる。これは苦痛であった。だが逃れるべくもなかった。私は、自分の心理学的な成果に裏付けを与えることを断念するくらいなら、観念してこれを受け入れるべきだと考えた。むしろそれがあまりに不作法にわたるのを避けたいという気持ちに打ち克てず、話を控えたり代わりのもので差し替えたりしたところもある」(『夢解釈 I』、p.5。I.R.M. pp.1-2)。学生時代に精神医学を学んだ経歴を持つブルトンは、もちろん批判者たちの偏見に与するはずはなく、次のように述べている。「こう言ったからとて、私には無意識的な

生における性欲の重要性を軽く見ようとする意図など全くないし、それどころか私としてはそのような性欲の重視こそが、精神分析学の最も重要な成果だと考えている。逆に私は、フロイトが、彼自身の場合を問題にしている際にこの成果からひきだし得たかもしれない有益な帰結を、全くのくだらない私的動機から犠牲にしてしまった点で、フロイトを非難するのだ」(O.C. II, p.118)。ここに読まれるように、ブルトンのフロイト非難は、告白について、つまり、夢の解釈に必要な自己告白を徹底しなかった点に向けられている。だが、フロイトの文章を読むと、患者の夢と自分の夢を使わざるを得ないこと、特に自分の夢の分析に不可欠な心的告白をすべきか否かひどく躊躇し(なにしろそれには心理学という学問の正当性の如何がかかっているのだから)、右往左往しているフロイトの迷いが手に取るように伝わってくるであろう。批判者はここにフロイトの権威主義的性格とブルジョワとしての体裁を取り繕うさまを見て貶しているが、むしろここには、「自然研究者」として学問に対する真摯な態度と心の内奥を隠されたくないというジレンマに引き裂かれた、きわめて人間的で正直な姿、そしてそれ以上に、告白ということの限界をフロイトが徹底的に自覚していたことが読まれるように思われるが、いかがであろうか。

- 6) ブルトンは単純にこう言い放っている。「夢の必要性は、われわれが夢を見るという事実からして、すでにことさら問題とするにはあたるまい」(Ibid., p.115)。そしてこの少し先では、こうも言っている。「夢の研究のために提供された最も新しい数々の認識手段の価値を検証する上でわれわれに与えられている唯一の可能性は、提供された理論 (la théorie) の客観的現実性が実践 (la pratique) という規準の中で追認を受け得るか否かを、われわれ自身の眼でたしかめてみることである」(Ibid., p.116)。ブルトン全集の注釈者はここで、理論の価値の試金石として実践を重視するのは、マルクス主義の影響であると述べている (Ibid., p.1384)。だがわれわれは、すでにブルトンにおいて、「理論」と「実践」という、シュルレアリスム運動の二つの主要軸の関係、その齟齬に苦慮し、様々な試みを繰り返したブルトンを知っている (拙論「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み (I)」、『人文社会論争』(人文科学篇) 第24号、弘前大学人文学部、2010を参照されたい)。そしてまた、註5) で述べた夢解釈に関わる固有の問題 (誰の夢か、そして夢分析に歯止めをかける自己規制) を払拭するために、ブルトンは自分自身の夢をあえて実験台にし、それを分析する決心をしたのである。その意味では、『通底器』はここから出発するといってもよいであろう。
- 7) Marguerite BONNET, Étienne-Alain HUBERT, 《Notice》, in André BRETON, O.C. II, pp.1348-1350.
- 8) Ibid., p.1349. また、上記の編纂者によれば、エリュアールがガラに宛てた手紙には、この時の朗読が書かれているという。「ブルトンは僕たちに、彼の本の最初の二章 (les deux premiers chapitres) を読んでくれました。それはとても重要で、僕の考えるに、それは僕たちがこれから弁証法的唯物論の方向を辿るのを決定的に可能にしてくれるだろう」(Paul ÉLUARD, *Lettres à Gala 1924-1948*, Édition établie et annotée par Pierre DREYFUS, Préface de Jean-Claude CARRIÈRE, Gallimard, 2015, p.151)。ここで全集編纂者が「最初の二つの部分」、エリュアールが「最初の二章」と言っている部分が『通底器』のどの部分を指しているのかははっきりとは断言できない。『通底器』は、I、II、IIIとローマ数字で記された三部構成をとっているが、そのIとIIなのか、あるいは、われわれが論じているIのなかの3分の2の部分なのか。エリュアールの手紙の表現からすると、前者を指しているのであろうが、そうすると、執筆を中断する前に、ブルトンはかなりの部分を書き上げていたことになる。
- 9) *Le Surréalisme au Service de la Révolution*, Jean Michel Place, 2002 (1976) [Réimpression].
- 10) ちなみに、この『革命に奉仕するシュルレアリスム』第3号に掲載されている個所は、Marguerite BONNET, Étienne-Alain HUBERTによれば、『通底器』本文のpp.139-141とあるが(《Notice》, O.C. II, p.1349)、少々異同はあるが、正確には、プレイヤッド版のpp.137-141である。第4号掲載分は、pp.106-116と比較的長い部分である。
- 11) このオブジェのデッサンのほうは、雑誌『シュルレアリスム革命』(*La Révolution surréaliste*) の第9号と第10号の合併号に掲載されている。

- 12) 「シュルレアリスムの遊戯で、最も有名なもののひとつ。4、5名の参加者が共同で、畳み込んで他人に見えなくした紙片に順番に書き込み、ひとつの文句、または、デッサン画を完成させることで成り立つ。ここでは、各人は、前の者の書いたり、描いたりしたものは知らないし、また、考慮することもしない。この遊戯は、最初、ことば遊びとして始められ、その成果である「優美な死骸が新しい酒を飲むだろう」から、「優美な死骸」と名づけられた。(……) これらは、因果関係に縛られ易い判断力が停止した遊びの自由なイメージから、精神のメタファー能力を高めるといふ、オートマティスムや「夢の分析」に始まる一連のシュルレアリスムの実験と同じ目的をもつものである。つまり、偶然、「でたらめ」、無作為から抽出される、詩的イメージの探求である。ブルトンは、自らの『優美な死骸』から生み出された詩的オブジェについて、解説を行っている」(濱田明・田淵晉也・川上勉『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』、世界思想社、pp.109-110)。
- 13) このネクタイについてブルトンはこう言っていた。「以上の分析の結果明らかとなったように、夢の顕在内容が私の主要な関心事として示そうとしているもの、つまりネクタイ探しとは反対に——しかもこのネクタイ探しは、ありとあらゆる奇妙なオブジェ、『シュルレアリスムの』オブジェ (objets *surréalistes*) を発見し、それを所有したいとさえ願う私の趣味、私がいかにももっていそうに見えるこの趣味に実際には正確に対応しているのだが——強調点は現実には他のところに、すでに見たように、人を無力にする性格を持ついくつかの情緒的表象と手を切るという必要性に、きわめてはっきりと置かれている」(O.C. II, p.135。傍点強調ブルトン)。ここでの「情緒的表象」とは明らかにシュザンヌを指している。
- 14) 夢のなかの「時間、空間、因果律」という問題、そして夢の研究者たちの思想的・イデオロギー的立場については、すでに拙論で大筋は論じているので、そちらを参照されたい(拙論「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(I)」、『人文社会論争』(人文科学篇)第24号、弘前大学人文学部、2010、pp.1-12。そして、拙論「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(II)」、『人文社会科学論争』第5号、弘前大学人文学社会科学部、2018、pp.17-34)。ただし「時間」については、重要な問題なので、以下でまた言及する。
- 15) O.C. II, p.1386.
- 16) エルヴェの著書には翻訳がある。エルヴェ・ド・サン＝ドニ『夢の操縦法』立木鷹士訳、国書刊行会、2012。原書は、ブルトンの文章にあるように、昔から稀覯本であり、いくつかの刊行書があるが、手軽に入手できる普及版は今でも存在しない。著者が所持している版は、Edition Claude Tchou 版を復元した Hervey de Saint-Denys, *Les rêves et les moyens de les diriger. - Observations pratiques*, préface de Robert DESOILLE, Les Introuvables / Editions d'Aujourd'hui, 1977 であるが、現在では、フランス国立図書館 B n F のウェブ・サイト《Gallica》で、初版の Amyot, 1861 版が閲覧できる。これは、Didier から刊行されている Alfred MAURY, *Le Sommeil et le rêve* についても同様だが、モーリのこの著書には四種類の版がある。1861年の初版、1862年の第2版、そして増補改訂版の3版が1865年、その再改訂版4版が1878年に出版されているが、上記サイトでは、フロイトが参照した1878年版だけはなぜか閲覧不可能である。一方、ブルトンが参照しているのは、1862年の再版だということである(O.C. II, p.1380)。
- 17) モーリの行った実験の一端は、フロイトの『夢解釈』で紹介されている(『夢解釈 I』。p.43, *I.R.M.* p.31-32)。
- 18) 『睡眠と夢』の161頁で紹介されているという、このモーリの夢は、体裁上は、一応フロイトの要約となっているが、ほぼ原文をそのまま翻訳したものである(Alfred MAURY, *op.cit.*, 1861, pp.133-134; 1865, pp.139-140)。
- 19) 興味深いのは、『夢解釈』が出たとほぼ同じ時期の1901年3月26日に、哲学者ベルクソンが「夢」(Le rêve) という講演をおこなっており、そのなかでベルクソンは、夢の実験者としてモーリとエルヴェの名前を列挙している(以下邦訳は、ベルクソン「夢」、『新訳ベルクソン全集5 精神のエネルギー』、竹内信夫訳、白水社、2014を参照。原文は、BERGSON, *Oeuvres*, Édition du Centenaire, Textes annotés par André ROBINET,

Presses Universitaires de France, 4^e édition 1984 (1959)を参照した)。ベルクソンは、この講演の導入部分でやはり、視覚や聴覚や触覚などの外的刺激、さらには内部からの身体的な刺激、病気の前兆などの「内的接触」(toucher intérieur)をあげて、それが人にさまざまな夢を見させる原因になるとわかりやすいたとえをあげつつ論じている。しかしながら、この夢講演の趣旨はやがて、『物質と記憶』(1896)で有名な「円錐体」の話へと移っていき、数ある「想起イメージ群 (souvenirs)」のなかの一つの「想起イメージ (souvenir)」がある対象へ焦点を定めていく知覚 (perception) あるいは意識化という極めてベルクソンの問題に収斂していく。覚醒時と違って夢のなかでは、この「想起イメージ (souvenir)」が暴走し、勝手に荒唐無稽な像を形成していく。いわば「知覚」が弛緩しているために夢の内容のちぐはぐさが生じてくるというのがベルクソンの主張であり、そこでモーリのギロチンの夢が例証として紹介されている。こうして見てくると、少なくともこの「夢」という講演においては、ベルクソンの関心は、夢の意味やその解釈に置かれていないことは明白である。ただ、ベルクソンは、夢のなかでも精神活動は休止することなく働いてはいるが、睡眠時においてはその働きが鈍ると考えていたようである。この点、モーリと似た意見であったようである。「夢のなかで、[われわれは] 論理的思考に無関心 (indifférents) になることはよくあることですが、その論理的思考において無能力 (incapables) になることはありません」(同書、p.128。傍点強調ベルクソン)と述べているので、夢もまた精神活動の一種であり、目覚めの時と睡眠時では、その「強度」が異なるというのがベルクソンの考えである。そして講演の最後にフロイトの名前を引用して原注をつけ、そこで、この講演が行われた時点では「[精神-分析] (la psycho-analyse) なるものは現下 [すなわち、他の講演とまとめて『精神のエネルギー』が出版された1919年である] に見るような展開を見せていたとはとても思えない状況であった」(同書、p. xi。)と締めくくっている。最後の言葉はなかなか意味深長であるが、ここではこれ以上フロイトとベルクソンの思想的関係に詳細に立ち入ることはしない。フロイトとベルクソンという同時代人ではあるが、これまでほとんど並べて言及されることのなかった二人については、次の非常に刺激的で行き届いた研究があるので、そちらを参照されたい。渡辺哲夫『フロイトとベルクソン』、岩波書店、2012年。

- 20) 仏語では《fantasme》、独語では《Phantasie》。通常、「幻想」と訳されることが多い。
- 21) 「夢工作は、夢思想の素材でもってこうした空想 (fantasme) を一から組み立てる代わりに、あらかじめお話し向きに見つかった空想を好んで利用するものだということに、いまいちど立ち戻ってみるならば、この洞察によって、ことによるとわれわれは夢の興味深い謎の一つを解いたことになる」(『夢解釈Ⅱ』、p.274。I.R.M. p.422)。
- 22) Jacqueline CARROY, 《Écrire et analyser les rêves avec Maury et Freud》, Alfred Maury, érudit et rêveur Les sciences de l'homme au milieu du XIX^e siècle, sous la direction de Jacqueline CARROY et Nathalie RICHARD, Presses Universitaires de Rennes, 2007, p.127.
- 23) Alfred MAURY, *op.cit.*, 1861, p.133; 1865, p.139.
- 24) Jacqueline CARROY, *op.cit.*
- 25) ちなみに、フロイトによれば、目覚めた後にわれわれが夢を忘れやすいのは、「抵抗」のせいであるという。「仕事の進展を妨げるものは何であれ、抵抗である」(『夢解釈Ⅱ』(第7章 A 夢を忘れること)、p.300, I.R.M. p.440)。
- 26) 英語版のStandard Editionの注釈によれば、『夢解釈』の末尾を飾る未来について語ったこの文章には、1911年の増補改訂第三版にだけ次のようなフロイトによる注が付けられているとのことである。「エルンスト・オッペンハイム教授(ウィーン)は、民話的な素材でもって、夢の中には、民衆もそこに予言的な意味を期待せず、その原因を、夢見ているあいだに現れてくる欲望の蠢きと欲求に求めるのがおよそ正当だというたぐいのあることを明らかにした。大概是「小咄」として語られるこれらの夢について、教授は近々、詳細な報告を行うことになっている」(『夢解釈Ⅱ』、p.492。また、*The Standard Edition of the Complete*

Psychological Works of Sigmund Freud Volume V (1900-1901), The Interpretation of Dreams (Second Part) and On Dreams, op.cit., p.621 を参照のこと)

- 27) すでに先の拙論で引用したが、再び引用する。いかにブルトンが「現実的矛盾」の解決に引き裂かれ、それをつなぎ合わせようとしていたかわかる。「生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いものと低いもの、すべてがそこから見るともはや矛盾したものとは感じられなくなる精神のある点が存在するように思われる」(*Seconde Manifeste, O.C. I, p.781*)。そして『通底器』の一節。「シュルレアリスムは、あまりにも分裂している数々の世界、つまり覚醒と睡眠、外的現実と内的現実、理性と狂気、さめた認識と愛、生活のための生活と革命、等々に分裂している数々の世界のあいだに一本の導きの糸を投げかける以上のことは何も試みたことはない、とみなされることを私は願っている」(*O.C. II, p.164*。傍点強調ブルトン)。特に後者は、具体的な生に密着した、なんと単純な願い、そしてなんと壮大な願いであろうか。
- 28) 拙論「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(Ⅱ)」、『人文社会科学論争』第5号、弘前大学人文学社会科学部、2018。特に、p.29 以下を参照されたい。
- 29) 「したがって、私がパラテキストと命名したものは、それによってあるテキストが書物となり、それによってあるテキストが読者、より一般的には大衆に対し、書物として提示される、そのようなものである。つまりパラテキストとは、ある限界、もしくは完全な境界というよりも、むしろ、ある種の敷居 *seuil* ないしは——ボルヘスがある序文について用いた言葉によれば——、中へ入る、あるいはそこから引き返す可能性をだれにでも提供する「玄関ホール」にほかならない。それは、内部と外部の間に存在する『曖昧な領域』、内部(テキスト)に対しても外部(テキストに関する人々の言説)に対してもそれ自体として厳密な境界を持たない「領域」であって、周縁というか、フィリップ・ルジュンヌが述べたように『現実を読み込みの全体を支配する印刷されたテキストの房飾り』なのである」(Gérard GENETTE, *Seuils, Seuil, 1987, pp.7-8* [ジェラルド・ジュネット『スイユ テキストから書物へ』和泉涼一訳、水声社、2001、p.12])。《Para-》という接頭辞については、ジュネットが注で引用している J・ヒリス・ミラーの記述の方が詳しいので、そちらも挙げておく。「Para-という接頭辞は、近接と距離を、類似と差異を、内部と外部を同時に意味する二重の対照的な接頭辞である(……)それは、境界、敷居、あるいは余白のこちら側であると同時に向こう側でもあり、境位の点では対等でありながらやはり二次的、あるいは補助的、あるいは従属的なものである——ちょうど亭主に対する客、主人に対する奴隷のように。この接頭辞のつくものは、内部と外部を分かち境界の両側を同時にあらわす、というだけではない。それはまた、境界そのもの、内部と外部を結ぶ浸透膜の役割を果たすスクリーンでもあるのだ。それは、内部と外部を同一視し、外部を内側へ、内部を外側へ横滑りさせ、両者を分離しながら結合させるのである」(《The Critic as Host》in *Deconstruction and Criticism*, ed. Harold BLOOM et al., The Seabury Press, New York, 1979, p.219) (同書、p.463)。
- 30) *Ibid.*, p.301 (同書、pp.372-373)。
- 31) *Le Petit Robert*, 《présent》の項参照。
- 32) 以下はいささか、前提の枠組みを外れた、大胆不敵で奇抜な論理展開と見えるかもしれない。しかし、フロイトもブルトンも、夢見ているあいだ、つまり「心的活動は睡眠中にも保たれている」と考えており、そうすると夢のなかの欲望は、夢で成就されることはあっても、それでお終い、というわけではないだろう。人間の心的(無意識的)欲望は、目覚めているあいだにも活動しており、それが白昼夢やファンタズムとして出現することはしばしば認められていることである。